

沙喫サキに似たりといふ、ヒルコダマの事にや、ヒルコ玉は冬に至れば、わけて深く蟄居す、春末より暖になれば、穴中を出るゆへに、淺利貝の中に交りて得る事、これあるよし、物音すれば、速に穴中に入るよし、鼯鼠アネゾミのごとく早しといふ、ゆへに得がたし、漢名石榼シキヤウならんか、猶識者に尋べし、

〔耳囊ミミ〕痔シの神とて人の信仰可笑事

今戸穢多町の後に痔の神とて、石碑を尊崇して香華など備へ禱るに隨ひて利益平癒を得て、今は聊の堂など建て、參詣するものあり、予が許へ來る脇坂家の醫師、秋山玄瑞語りけるは、玄瑞壯年の比療治せし、靈岸島酒屋の手代にて、多年痔疾を愁ひて、玄瑞も品々療治せしが、誠に難治の症にて、常に右病を愁ひ苦みて、我死しなば世の中の痔病の分は、誓ひて救ふべしと、我身の苦しみにたへず常々申けるが、死せし後、秀山智想居士といひし由か、る事もありぬとかの玄瑞かたりしま、記しぬ、

〔東都古墳志中〕秋山自雲靈神緣起

秋山自雲靈神は、攝津國川邊郡小濱の産にして、多田備中朝臣隨一の郎從、藤原仲光の末裔、狹間氏、其父六左衛門なり、其子は吉兵衛、江戸新川岡田孫右衛門に奉公して、生質直にして、後に家を繼て岡田孫右衛門といふ、三十八の比より痔疾をやむ、醫療盡て死に臨むで曰、七年難病に苦しむ故に、諸佛神に誓て、没後此病を憂ふるものを救ふべしといつて、延享元甲子九月二十一日死す、當寺に葬る、其後某痔疾に苦しむ事三年、自雲の言葉を思ひいだして、信願二月を過すして平愈す、是より世上に流布す、○中略

但十四年患へて、三年必死の病苦をなす、寺僧の話に、攝州多田庄大鹿村の産、

今痔佛といへる、寺中に別に靈神を安置して、餘程の宮居ともいふべきやうすなり、されども人々靈神とはいはず、痔佛々々と稱す參詣多し、